

ドキュメンタリー映画「蹴る」

彼女に一目惚れしたのは、2011年7月の暑い夏の日のことだった。

“なでしこジャパン”が世界一に輝いた歓喜の前日、電動車椅子サッカー日本代表と関東選抜チームの試合が行われた。同年11月にパリで開催されるワールドカップに向けての代表強化試合。私の目はいつの間にか関東選抜のある選手に釘づけになっていた。それが彼女、永岡真理選手だった。男女混合で行われていたなかで唯一の女子選手。「なでしこジャパンがもう一人、ここにもいる！」そう思った。勝負への強い意志、電動車椅子サッカーにかける情熱、アスリートとしての輝き、すべてが彼女のプレー、表情に宿っているかのように思えた。彼女の背後に炎が見えた。一気に電動車椅子サッカーの虜になり、永岡真理選手の所属チーム Yokohama Crackers の練習会場を訪ねた。そして彼女と初めて対面した私は思わず口走った。

「あなたは今後日本代表に選ばれると思う。4年後の世界大会にチャレンジする姿を是非撮らせてほしい」

そこから電動車椅子サッカーを追いかける日々が始まった。

電動車椅子サッカーの選手たちの障害は重度という共通点があるだけで様々だ。筋ジストロフィー、脊髄性筋委縮症（SMA）、脊髄損傷、脳性麻痺等々。選手の多くは歩くことが出来ず、手動の車椅子も自ら操ることができない。生まれて一度も歩いたことがない選手もいれば途中から歩けなくなった選手もいる。常時、呼吸器を使用している選手もいる。自力で座位をとれず車椅子に縛り付けられたような状態でプレーする選手もいる。そういった選手たちが自らの体形に合わせ改造した電動車椅子を自在に操り、時には2Gの重力を受けながら、サッカーをプレーする。

これほど重度の障害を持ちながら、これほど激しいスポーツが他にあるだろうか？

選手たちに共通するのは電動車椅子サッカーに対する想いの強さだ。多くの選手にとって“電動車椅子サッカーは生きることそのもの”だ。もっと言えば“電動車椅子サッカーをやるために生きている”のではないかと感じる選手もいる。最高の技術と戦術眼を持ちながら海外への渡航は無理だと判断され、無念の日本代表落ちした選手がいる。ぎりぎりのところで代表から漏れた選手もいる。一度代表落ちしたもののコンディションを取り戻し再び咲いた選手もいる。固形物を食べる事が出来ず体重が減り、口から食べることをやめ胃瘻（管から直接栄養を胃に取り込む）に切り替えた選手がいる。将来の代表を夢見てプレーする少年もいる。代表とは全く縁がないが楽しくプレーする選手もいる。若くして命を落とした選手もいる。

そんな選手たちの想い、生きざま、生きている証（あかし）を映像に刻み込みたい。

この映画は電動車椅子サッカーに打ち込む選手たちのプレーや日常を先入観無しで見つめることにより、等身大の姿に迫っていく。彼や彼女にとっての電動車椅子サッカーとは何か、障害とは何か、自立とは何か、そして生きるとは何かを問い直す。

スポーツとしての電動車椅子サッカーの魅力もあますところなく描きこむ。また監督である中村自らが介護職員初任者研修を受け介護の仕事も経験。そこから見えてくるものも取り込んでいく。

撮影は、2015年の世界大会を見据えて2011年8月に開始。前述した永岡選手の所属チーム Yokohama Crackers をベースとして関東圏、全国規模のすべての大会や日本代表合宿、オーストラリアで開催された国際大会の様相なども撮影。全国の選手やご家族、監督、医師などのインタビュー、選手の日常（学生生活、通院、手術、職場、デート等々）などの撮影をおこなっていたが、世界大会は2017年7月に延期となり撮影期間は6年に及ぶことになった。